

1. 大阪府とその周辺におけるツキノワグマの出没状況

文・図 幸田 良介 (大阪府立環境農林水産総合研究所生物多样性センター)



図-1 箕面国有林に設置した自動撮影カメラで撮影されたツキノワグマ
(2018年8月、約30台のカメラで約8年間調査し、この1回のみ撮影された)

はじめに

ツキノワグマ(図-1)は本州および四国に生息する大型の哺乳類である。近畿地方では、福井県南部から岡山県にかけて分布する東中国個体群と、紀伊山地に分布する紀伊半島個体群が知られている。これらの個体群はともに環境省レッドリスト2020において絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている一方で、近年は分布拡大状況にあることが指摘されており、集落環境への出没など人間との軋轢が深刻化しつつある。大阪府でも、以前はほとんどみられなかったツキノワグマの出没が2014年度以降は毎年報告されており、近年はその数も増加傾向となっている。大阪府内ではツキノワグマの恒常的な生息は確認されていないことから、周辺地域での分布拡大が出没数の増加に大きく影響していると考えられる。そこで、大阪府とその周辺部でのツキノワグマの出没情報とその変化を解析した結果について紹介したい。

各府県でのツキノワグマ出没情報

ツキノワグマの出没情報は、近隣住民への注意喚起の意味もあり、多くの都道府県がホームページ上で公開している。そこで大阪府のほか、京都府^{*1}と兵庫県^{*2}のツキノワグマ出没情報をホームページ上から読み取り、取りまとめた。ツキノワグマの行動圏の情報は多くないものの、最も広い報告では日光足尾山地のオスで約246km²、メスで205km²とされている。これはツキノワグマが季節的に行動圏をシフトさせる地域での報告なので、大阪府付近のツキノワグマでは大きくても半径10km程度の行動圏を想定すれば十分と言えよう。そこで、大阪府域から半径20km圏内の出没情報を大阪府内に出没し得るツキノワグマの情報と考え、3府県でのデータが利用可能な2007年度以降の出没地点の経年変化を調べた。なお、爪痕や食害痕など時期の特定が難しい情報しかないのであれば解析から除外した。

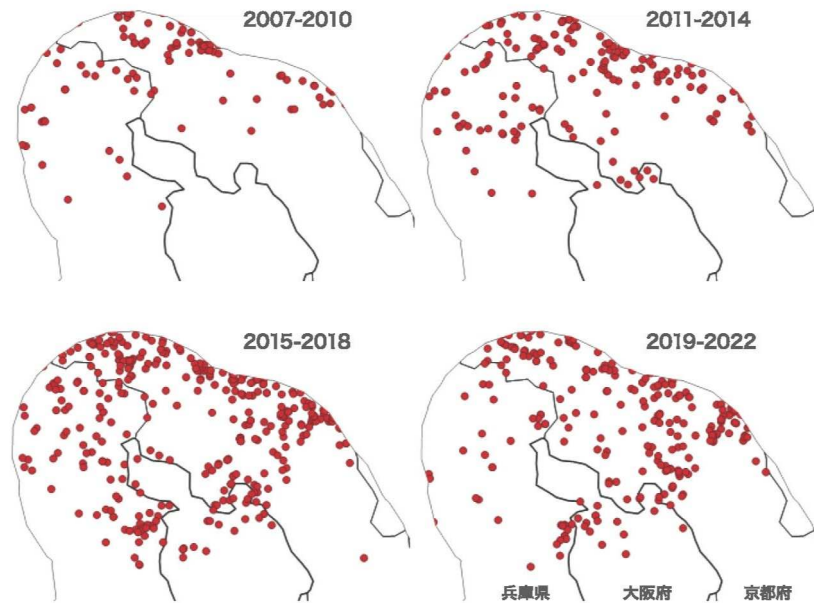


図-2 4年ごとにまとめた大阪府域から半径20km圏内のツキノワグマ出沒地点

大阪府とその周辺での出沒地点の推移

ツキノワグマの出沒地点は年を経るにつれて大きく変化しており、2018年度頃までは主として増加、そして南下する傾向がみられた(図-2)。2010年度までは大阪府内での出沒はなく、隣接する地域でも兵庫県側に点在してみられる程度であり、京都府側での出沒はほとんどない状態であった。しかし、2014年度頃には京都府側の隣接地域での出沒が急激に増加し、それ以降は定常的にみられるようになっていた。おそらくこの頃に、大阪府に隣接する亀岡市南部周辺を主な行動圏とする個体が定着し、現在に至っているのではないかと考えられる。2015年度以降になると、大阪府周辺での出沒は大きく増加し、京都府側に加えて兵庫県側の隣接地域でも出沒が頻出するようになっていた。猪名川町や川西市付近では特に出沒が集中してみられることから、この付近を主な行動圏とする個体が定着した可能性が示唆される。この頃には大阪府内でも、箕面市周辺など比較的南方でも出沒が

みられるようになり始めており、周辺での定着個体の増加が影響したのではないかと推察される。

2019年度以降になると、それまで増加傾向が継続していた出沒数が減少に転じていた。特に減少が顕著なのは兵庫県で、2019-22年度の出沒数は2015-18年度から半減している。兵庫県では2017年にツキノワグマ管理計画が策定され、2019年から有害鳥獣捕獲許可による捕獲が強化されていることから、これらの対策が出沒数の減少に寄与したものと考えられる。京都府でも2021年にツキノワグマの管理計画が策定されており、出沒数の減少要因となっているものと予想される。一方で、大阪府の隣接地域では依然としてまった出沒がみられており、大阪府内での出沒数はほとんど減少していなかった。このことから、やはり大阪府内での出沒には、隣接地域でのツキノワグマの定着状況が大きく影響するものと考えられる。

※1 京都府

<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/select.asp?dtp=676>

※2 兵庫県

https://wmi-hyogo.jp/sys/gyousei/kuma_list.aspx

今後のモニタリングに向けて

以上のように、大阪府とその周辺におけるツキノワグマの出沒状況は徐々に変化しており、近年は兵庫県や京都府での出沒数は減少しつつあるものの、大阪府の隣接地域では依然として出沒が継続しており、それに伴って大阪府内での出沒も継続・増加している状況が分かってきた。現時点では大阪府内にはツキノワグマは恒常的に生息していないとされているが、今後大阪府内が生息地の一部となる可能性は否定できない。今後は自動撮影カメラを用いたモニタリング地点を拡充するなど、ツキノワグマの侵入状況や定着状況を把握できる体制を整えていくことが必要であろう。同時に、大阪府内での出沒抑制には近隣府県での対策が大きく影響すると考えられることから明らかに、広域的な連携を進めていくことが重要であろう。

2. クマの出現にどう対応するか？

—保全協会主催「クマ対策学習会(講師:望月義勝氏)」報告—

文 木村 進(編集委員会)

保全協会総務部・安全委員会主催 「クマ対策学習会」

- ・日時:2023年12月6日(水)19時~21時、Zoomミーティング形式
- ・講師:望月義勝先生(元宝塚動物園・東中国クマ集会事務局長)
- ・参加費:無料
- ・参加者数:38名(最大時)アンケートによると3分の2は協会会員
- ・プログラム:①趣旨説明
②保全協会の紹介と安全対策
③大阪近郊のクマ被害の状況
④クマの生態、野外活動で遭遇しない方策、万一出会った時の対応策

はじめに

近年全国的にクマの出現と被害が増加している。前項でも取り上げたように、大阪府内でもツキノワグマの目撃例が増えてきており、観察会や里山保全活動・調査などを野外で行う際に、いつクマに出会うか心配される会員の声も多く聞かれる。そこで、総務部の安全委員会では、2023年12月に下記の学習会をオンラインで開催した。ここでは、その学習会の概要をまとめて報告するので、皆様の活動の参考にしていただきたい。

まず、クマをよく知ろう！

—出会わないことが重要—

クマとばったり出会うのが一番危険なので、それを避けるために、クマの多く出現する季節などをよく知ることが必要である。そのつぎに、もし、クマに出会った場合にはどのようにすればいいかについてお話ししたい。

まず、クマがいることを知ることが重要で、そのためのてがかりとな

るのは次のようなフィールドサインである。

① 足跡

クマの足跡はほかの動物と明らかに大きいのでわかるが、このスライドの例では長さが21cmくらいある。足跡は数日のうちに消えるので、それを見つけたら数日以内にクマがいたことを示すので、その場所からすぐに立ち去る方がいい。

② 糞

クマの糞には未消化のものが多く含まれ、季節によって食べるものが変わるので、それによって変化する。足跡と同様に数日でわからなくなる。初夏には山菜などを食べ糞に植物繊維が多く含まれ、夏は多肉多汁の植物を食べるのでべっとりした糞になる。秋はクリ・カキ・どんぐりなど食べ、人間に似た糞となる。

③ 爪痕

クマはカキの木などによく登

るので、幹に爪痕が残ることが多い。5本指で体重が重いので、5本の深い縦筋となる。新しいのは茶色で、古くなると黒くなり結構長く残る。

④ クマ棚(クマのざぶとん)

カキやクリなどの木で落葉した初冬に見つけやすい。これらの木の実の細い枝先にできるので、やや太い枝のところに座って枝を手繰り寄せては尻の下にひいて積み重ねていくことで棚状になる。

⑤ 食痕

かじったクリやカキの実が地面に散乱していたり、草本の葉の食べあとも残る。

大阪のクマは皆さんが思っているほど大きくはなく、体長は150~160cmで体重は45~100kgでおとなの腰ぐらいの高さで、秋にもっとも大きくなる。寿命は野生下では20年くらいで、動物園の飼育下では35~40年生きる事が多い。クマの1年は一般的には次のようである。

表-1 クマと出会わないための注意事項

- ① (梅雨期は雨の音でクマの気配がわからないので) 山菜とりなどでむやみに茂みや沢筋に入り込まない。
- ②新しい足跡・糞などがあれば、近くにいる可能性があるので、すみやかに引き返す。
- ③子グマを見かけても近づかず、安全なところに引き返す。近くに母グマがいる可能性が高い。
- ④ (普通、クマは臆病で人間に会いたくないので、先にクマが気づくように) クマに出会いそうな場所に近づくときは鈴や音の鳴るものを持って行く。

表-2 注意していてもクマに出会ってしまった時は

- ① けっして、あわてて大声を出したり、背中を見せて走りだしたりしない。特に逃げ出すと追いかけてくる習性があり、クマの走る速度を考えると逃げることは無理である。
- ② かなり近くにクマを発見したら、クマのようすを見ながらゆっくりと後ずさりをする。
- ③ 食べ物などが入っているリュックなどがあれば、クマの方へ投げて、気をそらす。
- ④ クマがもし襲いかかってきたら、地面に伏せて腕を組んで後ろ手にして後頭部を覆い、身を守る姿勢をとる。(中途半端な攻撃はクマを怒らせて危険)。

1～4月:

冬眠、中が空洞の根株や岩穴などで冬眠。体温は下がらず、刺激で起きてくる。冬眠から覚めた子グマがいる近くには母グマがいるので注意が必要。

5～8月:

巣から出てきてえさを求めて行動。6～8月は交尾期でオスの行動圏が広がる。春には山菜やタケノコなどを食べる。梅雨の時期に草丈の高い沢などで、山菜取りの人と遭遇する可能性がある。夏には蜂蜜や植物の果実も食べる。

9～11月:

冬眠準備のために餌を求めて活動範囲が広がる。餌が少ない年は集落に出てくる可能性が高く、注意が必要である。この時期は堅果(どんぐり類)やカキ・クリなどの果実を多く食べる。2023年はどんぐり類の凶作が重なって

多くのクマが集落に出てきた。

集落にクマが出てくると被害が起きやすいが、クマを誘引するものとして、民家に植えられたカキやクリの木、生ごみやそれを入れたコンポスト、家畜の飼料などがあげられる。兵庫県では、但馬牛を飼育している牛舎に入った事例や、ニワトリ小屋の飼料に誘われて入ってニワトリを襲った事例が知られている。特に西日本は植林率が高く、植林地は林床が暗くて食べ物もないので、野生動物は食物の多い広葉樹林の方が暮らしやすい。加えて子育ての冬眠穴が必要なので、巣と餌が確保できる場所にクマが多く生息していると言える。

クマと出会わないための注意事項をまとめると、表-1にまとめたようになる。

万一、クマに出会ったらどうすればいいか?

注意していても、出会ってしまったらどうすればいいかについては、表-2のアドバイスをいただいた。

大阪の北部でクマの出現が確認されているが、実際にはなかなかクマと出会う確率は高くないと思う。あっても遠くに見つけるくらいだろう。過度に心配することはないが、目撃例の多い場所に行く際には、急にばったり会うことがないように音を出しながら歩くなどして出会わないようにすることが重要である。中山間地域でクマの出現が多い場所より、あまり出現しない場所で出会うとパニックになって悪い結果を生む。また、他の地域では、近年、異常な行動をする個体が確認されている。ヒトを襲って、少し食べて残りを埋めたという事例も報告されている。